日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだいニュース

The Japanese Group Dynamics Association
http://www.groupdynamics.gr.jp/index-j.html

第３０号
（２００６年７月３０日）

発行所：〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科山口勧研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
Tel: 03-5841-3870 FAX: 03-3815-6673
e-mail: jjesp_ed@L.u-tokyo.ac.jp
発行人：山口　勧　　編集担当：山口裕幸

〈　目　次　〉

§第５３回大会（於・武蔵野大学）開催のご報告　・・・・・・・・　１
♪第５３回大会を開催して：小西啓史
♪HLMワークショップに参加して：三沢良
♪次回（第５４回）大会開催のお知らせ
§本年度『優秀論文賞』決定　・・・・・・・・　２
♪選考経過と結果のご報告：吉田俊和
♪受賞者の声：林直保子
§第１回『優秀学会発表賞』（第５３回大会対象）決定　・・・・・・・・　３
♪選考経過と結果のご報告：相川充
♪受賞者の声：真島理恵／岡本卓也／古谷嘉一郎／有泉優里
§アジア社会心理学会の活動報告：山口勧　・・・・・・・・　６
§会員異動　・・・・・・・・　７
§事務局からのお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先　・・・・・・・・　８

★★　第５３回大会開催のご報告　★★

第53回大会を開催して

小西啓史（武蔵野大学）

５月２７日、２８日の両日、武蔵野大学で第５３回大会を開催しました。大会当日はあいにくの天気でしたが、多数の方にご参加いただくことができました。事務局スタッフ一同、心より御礼申し上げます。今回、大会のお世話をさせていただいて強く印象に残ったのは、若手研究者による発表の多さです。若い研究者が多い学会であるということは承知していたつもりですが、正直言ってこれほど多くの発表があるとは思っておりませんでした。今大会から始まった優秀発表賞という新しい企画が、こうした傾向をより強めたことも確かだと思います。おかげでエネルギーにあふれた活気ある大会となりました。大変うれしく思います。こうした若い力がこれからのグルダイを引っ張っていくのだ、という思いを強く感じさせるものでした。

心残りだったのは、大学の授業があったためバッティングしないよう教室を選びながらの会場設定でしたので、幾つかのセッションを並行して行わなければならなかったことです。みなさまにはいろいろなセッションにご参加いただける機会をご用意したかったのですが、それがかなわず残念でした。３月は入試、５月、６月は授業期間中と、会期設定の難しさを痛感しました。総会でも大会の開催時期についてのご意見が出ましたが、今後議

論を重ねていただければと思います。最後になりましたが、準備に当たって、貴重なご助言、ご協力をいただきました山口勧会長、担当理事の相川充先生、事務局の村本由紀子先生にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

グループ・ダイナミックス学会のますますの発展を念じております。ありがとうございました。

****

HLM（階層的線形モデル）のワークショップに参加して

三沢　良
（九州大学大学院人間環境学府・
日本学術振興会特別研究員）

第53回大会前日に企画された「HLM（階層的線形モデル）を用いた個と集団のデータの分析」ワークショップに参加した。私自身、HLMを用いた論文に遭遇する機会が多く、常々、この分析法を学ぶ必要性を感じていた。そんな折り、ワークショップの開催はまさに朗報であった。

前半では、南風原先生が、集団単位で収集したデータに従来の分析法を適用することの問題点、HLMがその適切な分析手法となりうることを解説された。さらにHLMのモデルに含まれる基本概念と、それが表現する意味を、具体例を交えながら示してくださった。数式は最低限の提示に留め、本質的原理を明確に伝えようという配慮を感じた。統計アレルギーの方でも、きっと抵抗なく受講できたのではないだろうか。

続く後半では、奥村先生がHLM用の統計ソフトの使用法を解説された。サンプルデータを用い、データファイルの作成、操作手順、出力結果の読み取りの一連の流れを実演してくださった。受講者も一緒にPCを操作する実習形式をとり、ほぼ手取り足取りという贅沢なご指導を賜った。

今回のワークショップを通じて、HLMの基礎について理解を深めることができたと思う。まだまだ理解不足の点は多いため、当日の配付資料は永久保存版のバイブルとして大切にするつもりである。最後に、有意義なワークショップを企画していただいた常任理事会の先生方、そして南風原先生と奥村先生に心より感謝申し上げたい。

****

次回（第５４回）大会の開催について

７月２６日に発送しましたグルダイフラッシュでお知らせしましたように次回大会は、以下の日程・会場にて開催されることになりました。開催の準備にあたっていただく関係各位に感謝いたします。多くの会員の皆様のご参加をお待ち致します。

日　時：　２００７年６月１６日（土）～１７日（日）の両日
会　場：　名古屋大学
大会準備委員長：　吉田俊和（名古屋大学）

★★　本年度『優秀論文賞』決定　★★

「優秀論文賞」選考経過と結果の報告

選考委員長　吉田俊和（名古屋大学）

平成18年度日本グループ・ダイナミックス学会「優秀論文賞」の選考は、「実験社会心理学研究」第44巻1号と2号に掲載された論文を対象に行われました。規程により、過去に受賞経験のある第一著者の２編を除く12編の論文がノミネートされました。一次選考

は、各選考委員（理事）が1位（3点）から3位（1点）までに該当する論文について投票を行いました。種々の理由により棄権された選考委員もみえたため、結局14名の選考委員による投票となりました。一次選考結果では、原著論文に得点が集まる傾向がみられました。

この結果をもとに、大会前日の17時30分より、13名の選考委員による第二次選考会が行われました。本年は、選考委員の間で意見のばらつきがなく、満場一致で以下の論文に決定いたしました。

林直保子・与謝野有紀：
適応戦略としての信頼：高信頼者・低信頼者の社会的知性の対称性について

受賞の理由としては、以下のような意見があったことを付記いたします。

1．「信頼の解き放ち理論」を精査するために、２つの調査と２つの実験を手順を踏んで実施している点は説得力があり、論文としての完成度が高い。
2．高信頼者のリスク許容型機会獲得戦略と低信頼者のリスク回避型機会拡大戦略が共存することに着目し、これを実証したことに意義がある。最終的に、信頼感と社会的資源の組み合わせから適応戦略を論じている点も興味深い。
3．「信頼」という抽象的な概念を、リアリティのある調査や実験で実証していく手法は文句なくおもしろい論文である。ただし、一般的な信頼感が状況によって変動する行動のデフォルト値と定義し直してしまうことには、若干の疑問が残る。
4．「適応」をキーワードとして、今後も研究の発展が期待される。

****

「優秀論文賞」を頂戴して

林直保子（関西大学）

このたびは、拙論に優秀論文賞を賜りまして、大変光栄に思います。賞をいただきました論文は､他者の信頼性を示唆する情報に対する反応パターンを問題としておりますが、我々がもっとも多くの時間を費やしたのは、実は「信頼をどう測るか」という問題でした。尺度で測定した一般的信頼と、場面想定法で測定した一般的信頼の間の相関が低い、という事実が出発点でしたが、議論を重ねるうち、測定と定義との形式上の対応とは別の、人々の回答の意味と概念の定義との実際の対応についての議論へと発展しました。本論文の「第１調査」の前に、信頼の測定について考えるため、幾度もの学生調査を行いました。その議論と分析の一部は、社会意識の測定と解釈についての「量的データのセマンティクス」というチャプター（三角一人・高坂健次編『シンボリック・デバイス』）になりました。

論文の後半では、人々の保有する社会的資源の多寡と信頼戦略の関連性を検討しました。信頼について研究するためには人々の社会的背景を考慮する必要があると思いつつ、なかなか踏み出せずにいた小さな一歩を踏み出すことができた研究でした。論文を書き終えてみると､本研究を行うプロセスは､腰をすえて考えなければいけないと思いながらも、日々の仕事に追われて考えつくさずにきた測定と方法の問題について、じっくり考えるプロセスでした。そして、このような時間をもつことができたのは、数理的手法と計量的手法で社会階層について研究をつづけてきた、そしてとことん議論をする姿勢の持ち主である共同研究者にめぐり合えたからでした。

本研究は、実証としてまだまだ脆弱な何かであり、検討すべき課題が数多く残されています。すでに拙論文を読んでくださった複数の方々から、この問題を検討するために、我々が使用した材料を提供してほしいというご依頼がありました｡それらの研究の中から、またもっと別の流れの中から、意味のある信頼研究が生みだされることを、楽しみにしています。

★★　第１回『優秀学会発表賞』決定　★★

「優秀学会発表賞」選考の経過ならびに結果について

選考委員長　相川　充（東京学芸大学）

［選考の趣旨と対象者］

本年の大会から、学会発表の活性化を図るために、当年の大会における発表の中から優れたものを選考し、発表部門ごとに「優秀学会発表賞」を授与することになりました。本賞の対象者は、大学院在学中の者、または大学院終了後（退学後）５年以内の者です。

［選考の経過］

１．本賞の授与を希望する人は、大会発表申し込み時に、自らエントリーすることになっています。このことは今回の大会開催の案内状で、会員の皆様にお知らせ致しました。その結果、エントリーしていただいた発表は、ショート・スピーチが22本、ポスター発表が21本、ロング・スピーチが４本、English Sessionが７本、計54本でした（プログラムにタイトルの後に＊が付いている発表です）。

２．常任理事、理事から成る選考委員22名で１次審査を行いました（なお、常任理事の中から選考委員長を選び、私が仰せつかりました）。１人の選考委員は、各部門につき３本、計12本のノミネート発表を選考しました。18名の選考委員から回答があり、１人の選考委員から選ばれた発表に１点を与え、集計し、上位から５本の発表をノミネート発表として選びました。その際、５本目が同点であった場合は、同点の発表全てを残しました。その結果、ノミネート発表は、ショート・スピーチが５本、ポスター発表が９本、ロング・スピーチが４本、English Sessionが７本、計25本になりました。

３．大会当日は17名の選考委員が審査にあたりました。１つのノミネート発表につき３人の選考委員が審査しました。各専攻委員は、発表を見聞きして、その結果を総合的に判断して、５段階（５：非常に良い　４：良い　３：普通　２：悪い　１：非常に悪い）で評価しました。

４．４つの部門ごとに、大会前の１次審査の結果と、発表に対する２次審査の結果を合計して、各ノミネート発表の最終得点としました。この得点の最も高かった発表をそれぞれの部門における優秀学会発表賞としました。

［選考の最終結果］

上記の選考の結果、今回の大会で「優秀学会発表賞」に選ばれたのは、以下の発表です。

☆ショート・スピーチ☆

真島理恵・高橋伸幸：
多人数間の助け合い状況における選別的利他行動の実証的検討

☆ポスター発表☆

岡本卓也・加藤潤三・野波寛・藤原武弘：
集団の共有イメージによる内集団・外集団の境界線の決定2

☆ロング・スピーチ☆

古谷嘉一郎・浦光博：
犯罪防止に役立つ地域内活動・地域間活動・インターネットのチカラ：地域内活動・地域間活動・インターネット利用は犯罪防止に役立つのか？

☆English Session☆

Yukari ARIIZUMI & Susumu YAMAGUCH：
Effects of Gender-Differentiated Sentence Endings on Politeness Perception

[受賞者の権利]
受賞者は、受賞発表を『実験社会心理学研究』に優先的に論文投稿する権利を有します。つまり、「特別論文」に準じて、主査および副査１名で審査を受けることができます。ただし、この権利は、受賞発表から１年間です。今回は2007年６月８日までです。

［選考委員長からひと言］
エントリー発表の申込数から、本賞への若い会員の皆様の関心が高いことが伺えました。積極的にエントリーしてくださいまして、本当にありがとうございました。受賞されなかった方々の発表も、受賞された発表と審査得点の上では大きな差はなかったことを申し添えておきます。
受賞された方々、おめでとうございます！　これを１つのきっかけにして、さらにご研究を発展させてくださることを心より願っております。まずは、受賞発表をぜひ論文にしてください。

****

☆☆　受賞者の声　☆☆

ショート・スピーチ部門：
真島理恵（北海道大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員）

この度は大変名誉な賞をいただき、誠にありがとうございます。本発表では、近年シミュレーション研究から多人数間での助け合いを成立させる鍵として提唱された「選別的利他行動」に焦点を当て、実際の相互作用の中で人々の行動パターンを調べる実験の結果を報告させていただきました。具体的には、複数人が参加する資源提供（利他行動）ゲームにおける参加者の利他行動のパターンを測定する実験室実験を行い、その結果、人々が少なくとも「一次情報を用いた選別的利他行動（利他行動をとった人に対してのみ利他的に振る舞う）」を示すことを明らかにしました。この「選別的利他行動」は近年、心理学よりもむしろ生物学などの分野で研究が多く行われていますが、それゆえか、その行動を生み出す心理基盤についての言及は未だほとんどなされてきませんでした。そこで私は、これまでに存在する人間の利他性に関する膨大な心理学研究における知見や手法の蓄積をいかすことで、人間に適応的行動をとらせている心性を明らかにすることができないかと考え、その端緒として本実験を行いました。とは言いましても、私は利他性に関する心理学研究の蓄積についてはまだまだ不勉強な身ではあります。今後はより一層そのような研究について学び、人間の利他性の基盤解明という大きな目標に対して少しでも貢献していければと考えております。そのため今回、心の働きと対人相互作用のマクロパターンとの関係を研究対象とする本学会でこの発表にご注目いただけたことを非常に嬉しく、また励みに感じております。最後になりましたが、私達の発表をお選びいただいた審査員の先生方、そして発表に際してご質問や有益なコメントをいただきましたフロアの諸先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

****

ポスター発表部門：
岡本卓也（関西学院大学大学院社会学研究科）

今回、このような賞を頂いたことを大変光栄に思います。このコメントを書くにあたり、いま改めて喜びを実感しています。
この研究は、集団のイメージから集団間の関係を記述しようと試みたものです。集団間の関係に与える共通イメージの影響を確認するため、仮想世界ゲームでデータをとり、テキストマイニングを用いて分析しました。研究の方法を含め、今回の受賞は、周りの人のおかげであるように思われます。私の所属する大学では、数年前から仮想世界ゲームが実施されており、指導を受ける機会に恵まれました。また、先輩からはテキストマイニングについての助言を頂くことも出来ました。さらに、ゼミの仲間からは「見た目」の問題もよく指摘されます。フォントの種類にはじまり「サイズは10.5Ptより10　Ptが良いよ～」という細部にまで！このような環境が、ポスターの作成にも反映されたように思います。
第一回目の受賞ということですので、今後「あの賞をとれば！」と多くの方に思って頂

けるよう、これからも精進していきたいと思います。

****

ロング・スピーチ部門

古谷嘉一郎（広島大学大学院生物圏科学研究科）

今回、優秀学会発表賞を頂戴し、「私みたいな未熟者が・・・」と恐縮しております。

さて、今回発表させていただいた論文の簡潔な紹介をさせていただきます。本論文は、社会の課題の1つである「犯罪抑制」に対して、地域の活動や、個人のインターネット利用が、どのような効果をもたらすのかという点を検討したものです。その結果、「犯罪抑制」には地域の2つの“チカラ”が効果を持つことが明らかになりました。1つ目は、居住地域内部での連帯の“チカラ”でした。２つ目は、居住地域を越えた連帯の“チカラ”といったものでした。また、これら両者の“チカラ”が少ない地域では、個人がインターネットを利用することによって、犯罪抑制のための治安維持活動を活発に行うことも明らかになりました。

本研究は、広島県と広島大学による共同プロジェクト「犯罪の起こりにくいまちづくりに向けた総合対策に関する研究」の一環として行われたものでした。そのため、今回の発表賞については、さまざまな“チカラ”が組み合わさって、いただけたものであると考えております。まず、共著者である浦光博先生、そして、このプロジェクトに協力いただいた広島県警の皆様、さらに、質問紙配布、データ入力に協力していただいた諸先輩、同級、後輩の皆様、地域データ利用を承諾していただいたJGSSデータ事務局、SSJデータアーカイブの皆様、そして、何よりも、調査に協力いただいた皆様・・・。感謝の念に堪えません。今後もこの受賞を励みに研究に精進していきたいと考えております。ありがとうございました。

****

English Session

有泉優里(東京大学大学院人文社会系研究科)

日本人の聴衆を相手に英語で発表するのは緊張します。日本語でも通じるところお互い母国語でない英語を使うところに気恥ずかしさを感じるのです。しかし、英語セッションには海外から多くの研究者がお越しくださったせいか、国際学会のような雰囲気で発表することができました。聴衆の言語を気にする理由は他にもあります。私達の研究では日本語の会話表現を扱っているため、日本語ネイティブでない聴衆には説明を工夫します。この発表に、賞に与るような点があったとすれば、ひとつは海外からご参加くださった皆様のお陰です。また、ご指導くださった先生方、評価してくださった先生方、コメントをくださった皆様、発表をご覧くださった皆様に、心より感謝を申し上げます。

この研究は、会話文末の男性形式や女性形式が、話者についての印象に及ぼす影響を検討したものです。文末表現には男性用と女性用に区別できるものが多く、例えば、「映画を見てきたんだ」は男性形式、「映画を見てきたの」は女性形式に識別できます。女性形式には、主張や断定を和らげ、聞き手の気持ちや決定権に配慮する働きがあるのに対し、男性形式にはそのような配慮が欠けるといわれています。この機能に基づいて、女性形式が他者配慮(being　polite)の印象を与える効果に着目しました。文末表現の特徴には日本文化における他者配慮の重要性が反映していると考えられ、日本人の心理的傾向への理解を深めるためにも、内外の研究者にこの研究を知っていただければ幸いです。

★★　アジア社会心理学の活動報告　★★

アジア心理学会に関するご報告

会長　山口　勧（東京大学）

グルダイとアジア社会心理学会との連携は順調に発展しています。主な活動は、Asian Journal of Social Psychologyの共同刊行ですが、その他にも5月に開催された第53回大会において共同シンポジウムを開催し、多くの参加者がありました。さらに、9月に東北大

学で開催される社会心理学会において、グルダイも参加するアジア社会心理学会との共同シンポジウムが開催される予定です。このようにグルダイとアジア社会心理学会との連携は日本の社会心理学の中で根付いてきたと言えると思います。

Asian Journal of Social Psychologyは、論文の質および投稿数とも、順調に発展しています。その詳細はすでにグルダイフラッシュでお知らせしたBlackwellからのレポートにあるとおりですが、最近の投稿数を見ると、2005年は134本の投稿論文があり、そのうち17本がすでに受理されています。掲載不可となったものは93本でした。また、2006年は六月末現在で69本の投稿があり、今年も投稿数が増加すると思われます。こうした状況に対応して、Blackwellとの契約を改定し、2006年からは冊子を大きくし、また増ページを予定していますが、これまでの契約どおり、グルダイの負担は2007年まで変更はありません。

次回のアジア心理学会第六回大会は2007年7月25-28日にマレーシアのコタキナバルで開催されます。すでにその案内は、
http://www.asiansocialpsych.org/AASPConferences/2007Sabah.aspxにありますので、多くのグルダイ会員が来年の夏の計画に組み入れ、参加して下さることを願っています。

また、アジア社会心理学会の姉妹学会として、The Asian Association of Educational and Developmental Psychologyの発足が計画されており、10月28日、29日に発足大会が韓国の仁川で行われます。すでに詳細はグルダイフラッシュでもお知らせしましたが、参加ご希望の方は以下のようにProf. Uichol Kimにお問い合わせください。

Uichol Kim, Professor, College of Business Administration,
Inha University, 253 Yonghyun-dong Nam-gu, Incheon, 402-751, South Korea.
Tel: 8232）860-7815, 860-7816. FAX: 8232）876-7815. E-mail:
uicholk@chol.com; uicholk@yahoo.com; uicholk@inha.ac.kr

このようにアジアではますます活発に研究活動が行われるようになっております。グルダイがその発展に大きく貢献していることは非常に喜ばしいであり、会員の皆様にご報告申し上げます。

★★　会員異動　★★

オンライン化に伴い、個人情報保護の観点から、新入会員の皆さんについて従来お知らせしていた連絡先の掲載は割愛することにしました。また、住所変更・所属変更の合った皆様についても掲載を割愛しました。現在新しい会員名簿の作成中ですので、詳しくはそれがお手元に届いた後にご確認をお願いいたします。

◆新入会員◆

漢字氏名	所属機関
青木　千帆子	大阪大学人間科学研究科ボランティア人間科学講座
赤坂　瑠以	お茶の水女子大学大学院
伊藤　公一郎	名古屋大学大学院
伊藤　恵美	広島大学大学院生物圏科学研究科
井上　和夏	大阪大学大学院人間科学研究科
上原　依子	大阪大学大学院人間科学研究科大坊研究室
江口　圭一	広島大学大学院社会科学研究科
遠藤　茉莉恵	大阪大学大学院人間科学研究科
奥村　美紀子	早稲田大学大学院文学研究科博士課程
角心　理枝子	広島大学大学院生物圏科学研究科
笠置　遊	大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学講座
金谷　悠子	広島大学大学院総合科学研究科
鎌田　雅史	岡山大学
具志堅　伸隆	東亜大学総合人間・文化学部
黒川　恵子	岡山大学大学院文化科学研究科
作道　信介	弘前大学人文学部
迫田　裕子	岡山大学大学院文化科学研究科
佐藤　敞	大阪大学大学院人間科学研究科

佐野　予理子	国際基督教大学大学院教育学研究所
鮫島　輝美	京都大学大学院人間・環境科学研究科
澤海　崇文	東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室
品田　瑞穂	北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室
清水　ひろのり	立正大学
菅　磨志保	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
諏訪　博彦	電気通信大学大学院情報システム学研究科
関　嘉寛	大阪大学大学院
田垣　正晋	大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科
竹内　みちる	京都大学大学院人間・環境学研究科
田島　充士	筑波大学
田端　拓哉	大阪市立大学大学院文学研究科心理学教室
田村　達	東北大学大学院文学研究科人間科学専攻
丹波　秀夫	早稲田大学文学研究科
津田　恭充	名古屋大学大学院環境学研究科
手塚　弘一	産業能率大学
豊沢　純子	名古屋大学大学院環境学研究科
難波江　真里子	広島大学大学院総合科学研究科
福沢　愛	東京大学大学院
藤ヶ谷　綾香	広島大学大学院
文野　洋	首都大学東京人文・社会学心理学研究室
堀江　尚子	大阪大学人間科学部研究生
馬　偉軍	NOVAお茶の間留学センター
牧野　泰典	立命館大学
松尾　由美	お茶の水女子大学大学院
三島　匠子	広島大学総合科学部
村上　幸史	大阪大学大学院人間科学研究科
矢崎　裕美子	名古屋大学大学院教育発達科学研究科
山中　茂樹	関西学院大学災害復興制度研究所
横山　ひとみ	大阪大学大学院人間科学研究科
和久田　苑美	名古屋大学大学院教育発達科学研究科
渡邊　舞	北星学園大学大学院社会福祉学研究科心理学専攻

◆退会◆
浅賀直樹・朝美淑子・井上麻紀・岩根久美子・葛西　俊治・黒川　正流・小林　江里香・佐藤壽郎・佐藤靖子・佐野真子・杉渓一言・鈴木結花・須田英明・田中健太郎・塚本恵信角田勝也・中田隆行・西川純・野田昌太郎・長谷川隆・林理・平井美佳・平野澄男・松野良一・三井宏隆・森口和・山本眞理子・横矢規

★★　事務局からのお願い　★★

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集
「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文３編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（Ａ４版１－２枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。URLは、http://www.groupdynamics.gr.jp/tokusyu.htmです。ご参照ください。
なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集
事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。

よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★　広報担当からのお知らせ　★★

◆JGDA_Flash：グルダイでは【日本グループダイナミックス学会・広報（速報）メールマガジン】(JGDA_Flash)を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約６００名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思いますが、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、グルダイ広報メールマガジン運営担当マスターのアドレス

office@groupdynamics.gr.jp

までお願いいたします。また、新刊案内や研究会案内等のニュース記事も大歓迎いたします。同アドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、

http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs.cgi

で閲覧可能です。

★★　グルダイ学会関係連絡先　★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは、
中西印刷株式会社 学会部　（日本グループ・ダイナミックス学会担当：岡田）
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
TEL: 075-415-3661　　FAX: 075-415-3662　e-mail: jgda@nacos.com

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見は、
「実験社会心理学研究」編集事務局
東京大学大学院人文社会系研究科(社会心理学)　山口研究室内
Tel: 03-5841-3870 FAX: 03-3815-6673 e-mail: jjesp_ed@L.u-tokyo.ac.jp

◆ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは、
九州大学大学院人間環境学研究院　集団力学（山口裕幸）研究室
〒812-8581　福岡市東区箱崎6-19-1　九州大学大学院人間環境学研究院
TEL・Fax：092-642-3160
もしくは、E-mail：office@groupdynamics.gr.jpまでお送りください。
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◆学会事務局
横浜国立大学大学院 国際社会科学研究科 村本研究室
TEL/FAX: 045-339-3714 E-mail: sec-general@groupdynamics.gr.jp

◎（編集後記）　オンライン化第１号は、ゆっくりと読んでいただきたい記事に焦点を絞った構成を心がけました。優秀論文賞・優秀学会発表賞の受賞者の皆様の声を掲載したのも、そうした考えからです。いかがでしょうか。「もっとこんな記事を掲載して欲しい」というご要望の声・ご批判の声をお寄せいただくと編集子としては大変ありがたく存じます。

ご存じのように重要な連絡・速報性の高い情報はＥメールを利用した「グルダイフラッシュ」でお届けしていますし、それは蓄積されてホームページから再確認することもできます。また、インターネット環境を活用しない会員もおられることを勘案して、全ての会員にお伝えすべき学会彙報は、機関誌「実験社会心理学研究」に掲載することになりました。今後も会員の皆様に役立つ広報活動を心がけて参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。（編集子）